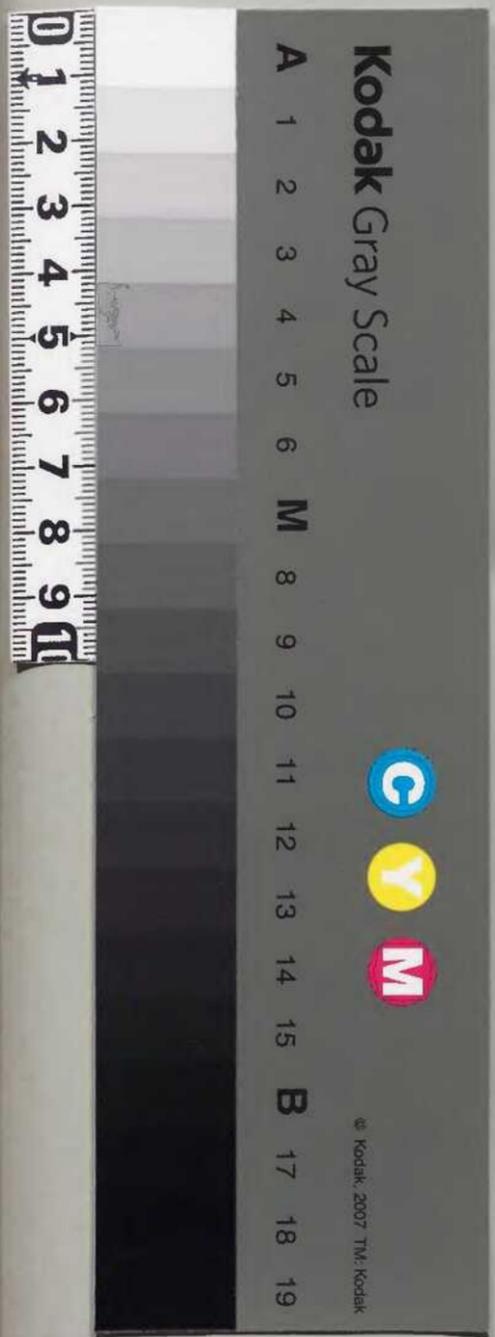


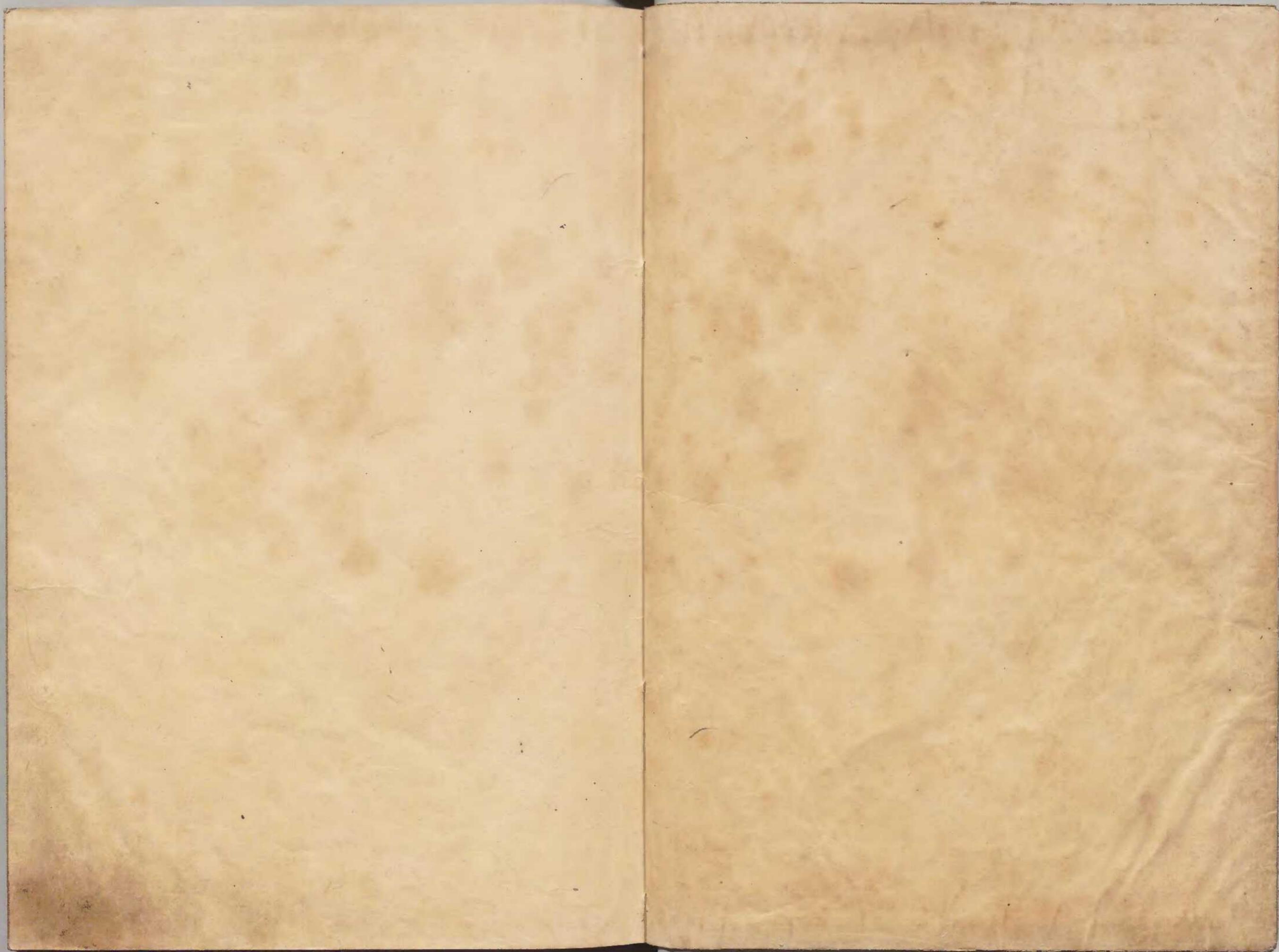
寛永諸家譜

清和源氏丁九冊之肉
頼光流

30

| | |
|------|------------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 20199 |
| 冊數 | 186 (30) |
| 函號 | 特 76 1 |





仙石 極村
 鳴田 妻木
 保く 揖斐
 蓮山 肥田

寛永諸家系圖傳

清和源氏

頼光流

仙石

丁七

淺草文庫

家傳ふし〜〜去政の末流なり先祖仙石
 氏の養子と云ふに仙石と称す

久盛

治長流

法名淨壽

秀久

越前守

浪五郎下

生國義流

少年より秀吉少将として武勇の才を著し

あつらひ漢語國とてまじら又あつたため

く價收國と領をもてはなりりては収

てしり

天正十八年小田原陣の時秀吉の教先

とてしりりて先陣の目つけとせり小田原

没落の後信列佐久郡小諸の城を築

長五郎奥列陣の時

と信院敵りしとてしりりてしりりて

ふしりりしと信列と陣敷向りりて

高田と陣敷の陣秀吉先がけとせり

と田舎とせり

同十九年五月より江戸へあつて病歿す

田舎 法石道樹

忠政

多部大膳 生國近江

長元元年志田陣の時父秀久を討つ

と田の城とつて

同十九年秀久死すの故遺法とつて

小治の城と領と

大坂あきの御陣とつて

元和八年と田の城とつて

寛永八年四月廿日江戸あき死す五十一歳
法名宗智

久澄

大和守 生國信濃

慶長九年

右徳院殿より

大坂あきの御陣より兄忠政とつて

伊予守

元和二年清書院しんかんあたらふ
同九年

將軍家しんげんふつふつはらくまつ

寛永二年清使しんしあたらふ

同六年清目付しんめあたらふ

同十二年清小姓組しんせぐみの番ばん改かへととははつ

らふ

久ひさ邦くに

右みぎ近きん 生なま國くに武ぶ列りつ

寛永二年十一月しんねんて

將軍家しんげんととああららふ

同十二年七月釣命きんめいふふららてて清小姓組しんせぐみの

出で書しよ入いり

政せい後ご

越こし前まへ書しよ 江え五ご位い下げ 生なま國くに信しん流りゅう

元和九年

台徳院殿とあり

寛永五年

將軍あともあり

同年又遺法とつりての城と領と

政則

織部 生國同あり

寛永十一年

將軍あともあり

同十八年清小姓組の清妻とつり

政勝

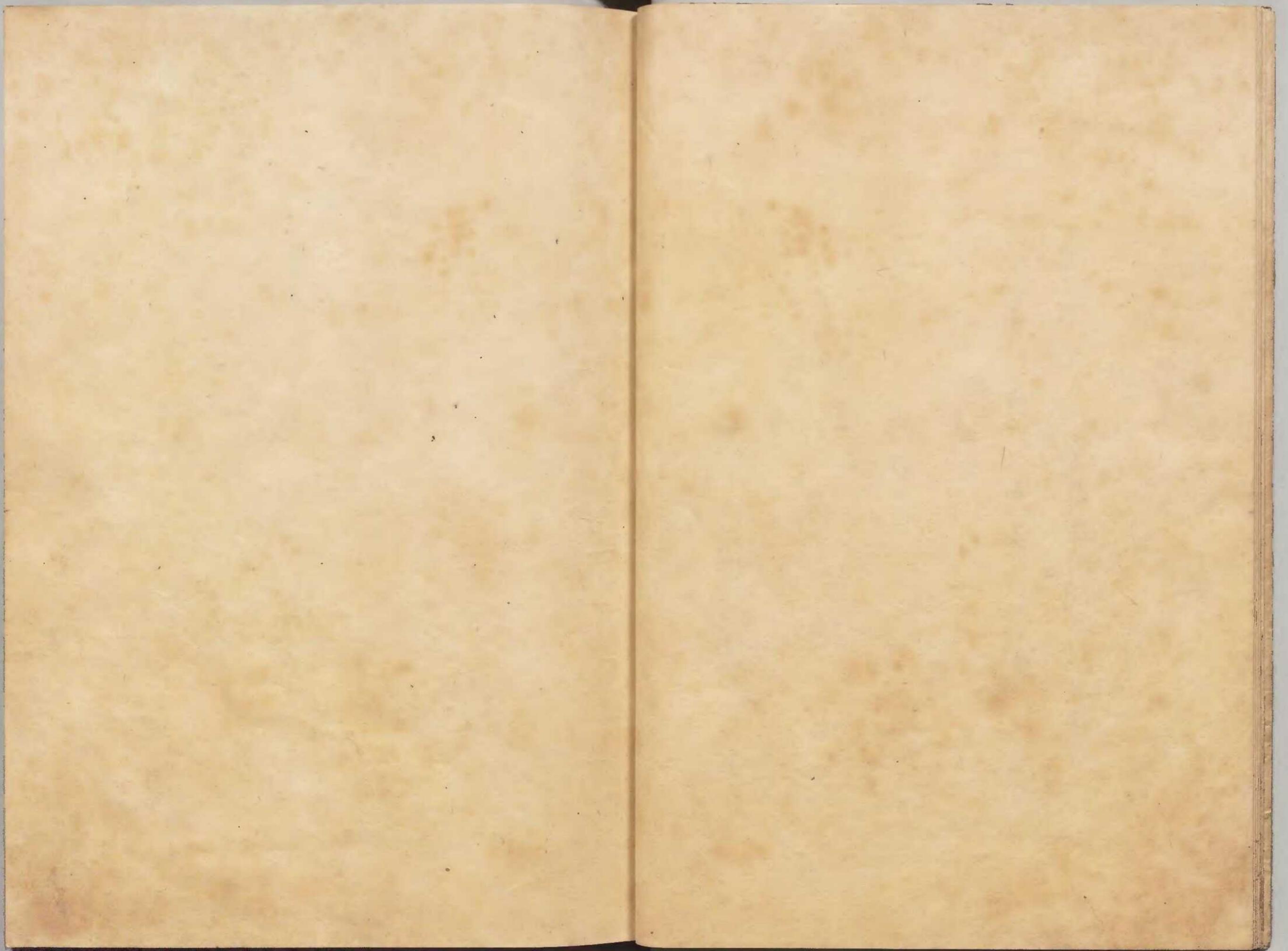
采女 生國氏

寛永十一年

將軍あともあり

同十八年清小姓組の清妻とつり

家紋永樂通寶



東

極村

新六郎

お羽守

生國三列

天文四年十二月の節に

清康君を害したる時

昂座より海七郎を誅して

ら守りし新六郎十郎

同十九年浅井某 或作左某 せしよの

廣忠ひろたかと実まことたぐまたぐまりてあけら内

出でねのちを仕しのらぬ館へありしく路

橋はしのうへうあかく浅井あひ

とま逆さかりてすららまじしひ相

とりふらんて堀ほりの中はありおりり

浅井あひとついさしありしおね

守まもりしるはいまき大逆さかの人がり

志しくもげられしるはいまき大逆さかの人がり

出でねちとたまらんがせしけのより

いましるもりりしるはいまき大逆さかの人がり

といらんぐい出でね守いしるはいまき大逆さかの人がり

せしるはいまき大逆さかの人がり

堀ほりりりる人皆みなこもと應受うけ寸すん式しき

いましる浅井あひとりりしるはいまき大逆さかの人がり

家政かせいりりとまらしるはいまき大逆さかの人がり

いましる浅井あひとりりしるはいまき大逆さかの人がり

天正五年十一月死去

家次

新右衛門

生國同家

天正十二年長久寺合戦の時首とぬる

長久寺二十二年長久寺に死す

宗泉

家政

新右衛門

お羽子

生國駿河

長久寺十一年長久寺

大持現に侍りしに

右衛門殿に侍りしに

同十三年没五位下に叙す

家貞

右衛門佐

寛永七年二月

台漣院殿

將軍あまとありたくまつつ

同十二年十二月いつこけいに叙しと

政春

市いち並な 生國武列な

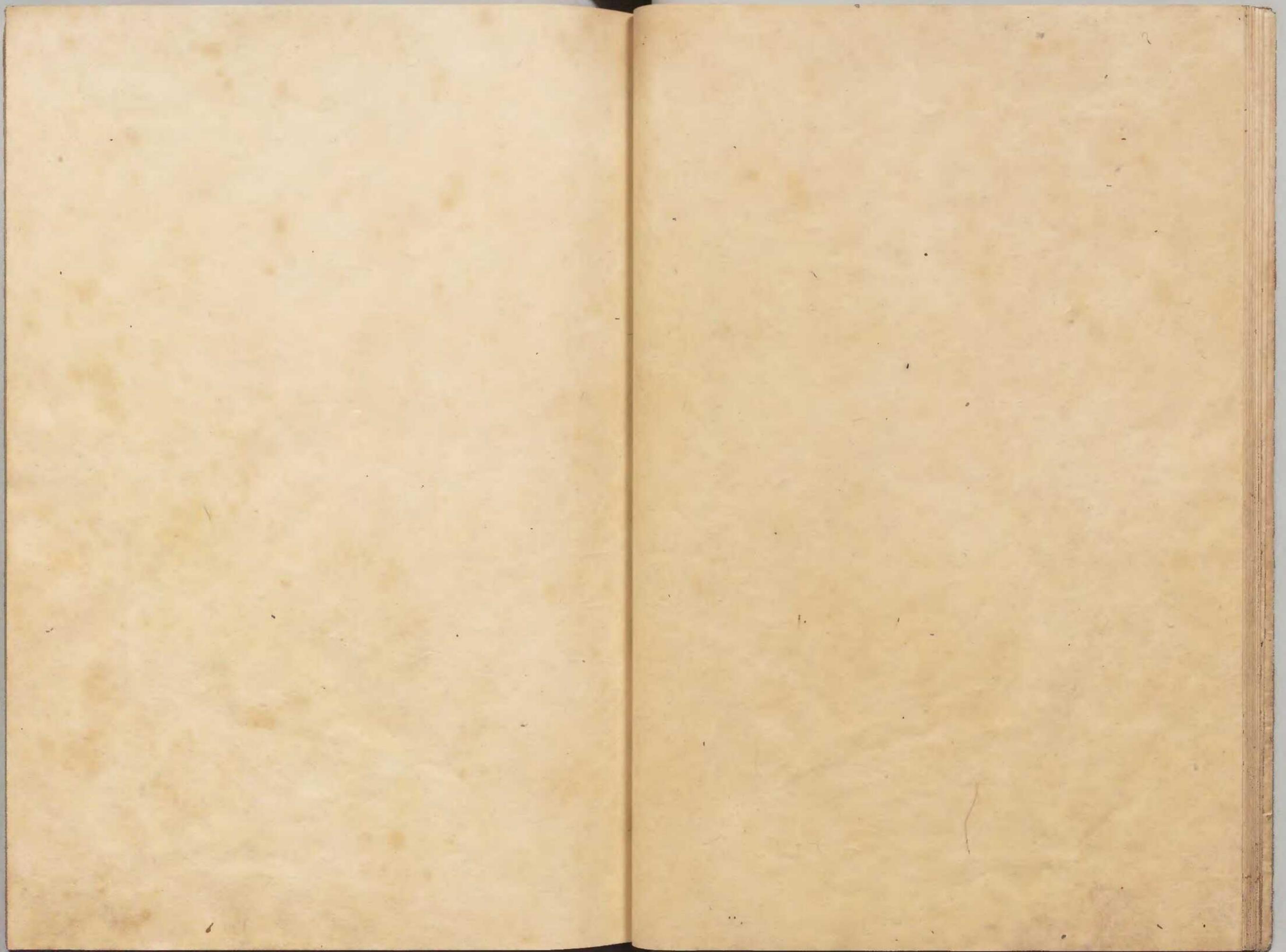
寛永十二年

將軍あまとありたくまつつ

同十四年正月いつしに書院しよのえんとありたくまつつ

同十六年十二月いつしにしのしとありたくまつつ

家紋いのしんしつのうたにいんどきこのしんえ
九内一文字いつしにしのしとありたくまつつ



● 泰職

常刀 生國三列

植村

先祖古後より初々代植村の里
住まふゆへに氏と守家傳り
いづく植村氏ハ 清高家代家
長〜り

しづめハ僧少く之列鳳来寺の別當と
なりて安養院と号す
元龜二年三方ヶ原合戦の時伊加勢
として

東照大権現ノ志ヲ示シテ
之ヲ仰ク由シハ感テ仰テ
郡ノうちあり知リ有領トこの時ハ
是を依と
天正十八年小田原陣の時
釣合

よりて泰忠ヲ甥ト多平八郎忠勝時ハ
十歳ニ至リテ武列岩舟の
城ニ在リ五月廿日泰忠先カケテ
進平の門ヲ入大ニ軍功あり
二人の勇功と感シ
大権現この時の賞として
の城ニシテ三子石
天正五年と秋原徳謀反の時泰忠
カシヒテ忠勝

本多忠勝 台命とありて流列被草
の城とせしつ時忠勝がくみりうらうらと

泰勝先くけしあり

冥ヶ原合戦の時徳とついでて首をと

ゆきりこの時教二勝とくらしり忠勝は

しと

大指現

台徳院教へ言とくれしけりし徳感

あり

同七年

台徳院教くしきくしきありて父子も

勝浦の城を住と

同十八年伏見の城とありてを妻と

同十九年大坂陣の時伏見くあり

台命により安倍やありと

しに居崎海とのにきくしとあり

大坂和賂ありて西區陣のはりし

伏見の由ありとほし

元和元年大坂再戦の時本多忠勝守
志願し先陣にたしき力戦
志願し首十二とぬり城中美とあふ
櫓の門に傷きこもる勝山とて
大指現へ西目刀くしし時合戦の時
はくしゆへ泰勝しきこのあし
きこと言じし

同五年

名徳院殿へけくしきりて大津に
去る

の以とけり

同九年

將軍家へしあは

寛永十年四千石の山加増と
都合九子石の来地と領と

同十一年死を時り五十七歳

法名覚石

泰朝

たいていさしむこぬけ

常刀 近五位下 生國と総

寛永十八年

台座院殿

將軍家とあり

寛永九年 近五位下 叙と

同十二年 又泰勝 白紙とあり

泰治

こまき

左京 生國武列

寛永十四年

將軍家と詳と

政泰

しんこくろ

平右衛門 生國と総

元和六年

台座院殿とあり

寛永九年常陸の國康高のうら竹井
村より五百石の地と給り

則泰

教馬 生田同の

寛永十二年政泰の向領と給り

家紋丸内一文字下栝梗花葉こ

正忠

飯沼三平右衛門

生國三列飯沼よきり

植村

家傳いふしつとくこき氏うぢありて初はつめ
ハ飯沼いひぬまよし号ななを飯沼ハ藤氏ふじうぢたり
こしついひも正勝せいしやう時ときありて
東照大権現の命のみことにより植村うえむらと称なづす

教しんとりをしる

同十四年

大権現おん後ご府ふよりり淡たん松しょうへい津しんの時とき正せい勝しょう

淡たん松しょう津しん城じょうのの強けい兵へい衛ゑとなりし

同十八年小田原陣せうでんげんの時とき正せい勝しょう足あし柄がらの

城じょうとなりしり秀しゅう吉きちのの命ことよりしりこと

阿あらら小せう田でん原げん落らく城じょうのの後ご秀しゅう吉きちいりりりて

大権現おんよりり告つたたまましり是こふふりりてて東とう

入い國こくのの後ご東とう地ちとなりしりりりす

文ぶん禄ろく元げん年ねん相さう列りゅうよりり死ししり十八年じゅうはちねん法ほう名めい
道どう覚かく

正元

庄しょう院いん 生せい國こく三さん列りゅう 法ほう名めい源げん心しん

三さん列りゅう

大権現おんとなりしり

天てん正せい十九年じゅうきゅうねん領りやう地ちとなりしりす

正朝

生國同好

大持現より兄正えの領地と

長五年冥原の陣に供^くを^また^はす^はば

台漣院殿よりつゝく大^おの^のあ^あと^とは^はし^して

復^たり^りの^のあ^あと^とは^はし^して

同十六年病^び死^し二年八^は年

法^は名^な若^わき^きと

正相

生國武列江戸

長十四年十一^じ年

台漣院殿よりま^まの

元和三年お^おの^のあ^あと^とは^はし^して

と^とは^はし^して

正真

生國同好

寛永九年十^じ年

將軍 家^とあ^らむ^と

同十八年^のあ^らむ^と大^のあ^らむ^と

正村

五郎

正武

五郎

正良

久五郎

正次

五郎 右衛門尉

台徳院殿^へけ^んく^わん^のま^つら

大坂^の陣^にく^わん^のま^つら

將軍^のあ^らむ^とつ^らの^まつ^ら

正光

孫右兵衛

寛永七年

將軍家と為り

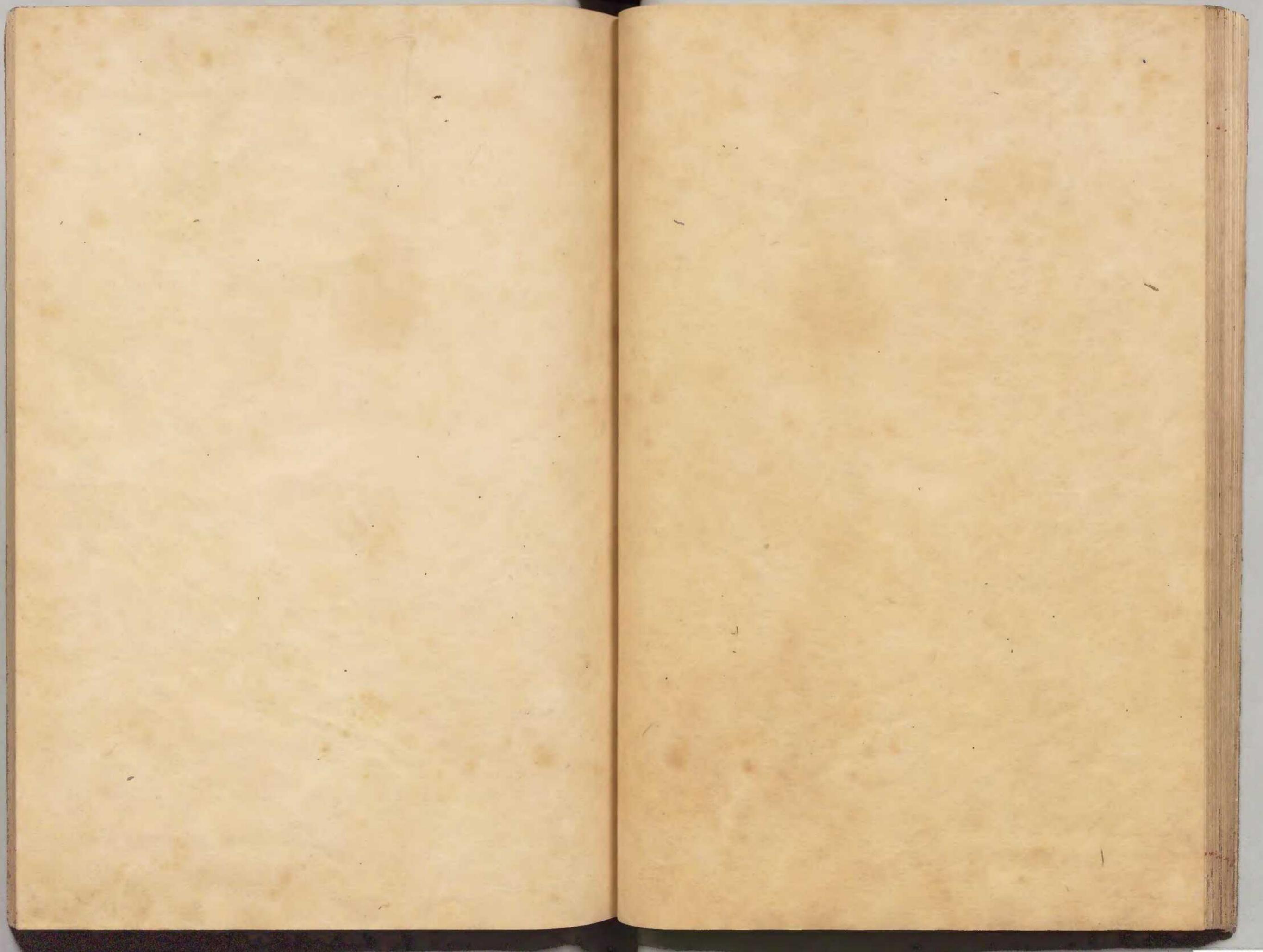
正信

三郎

寛永十二年

將軍家へ為り

家紋丸内一文孝三羽



河田

● 頼清

古波六郎

頼康

大膳大夫

嘉文元年十二月廿五日昇殿

瑞岩みづかふおわく死す東七十

満貞みつさだ

瑞田みづの伊い孫そ守もり

某なにか

某なにか

某なにか

十じゅう兵へい衛ゑい 生せい國こく冬とう列れつ

天文十六年四月十八日冬列とうれつ思おも汚よごれれ城じょう
中ちゆうふぶわわくく 廣こう忠ちゆう錦きんふぶららししくくの
ありあり何なに十じゅう兵へい衛ゑい 廣こう忠ちゆう錦きんふぶららししくく
城じょう中ちゆうふぶああつつくく敵てきととおおたたくくくく城じょう
下かふふわわくく討うち死し

某なにか

右みぎ京きやう亮りやう 生せい國こく冬とう列れつ

壯さう年ねんのの時とき戦せん場ばうふふわわくく右みぎ年ねんをを底そこ

清くはしゆへより夫々しる事あはさず
三方原の合戦は淡松の清波の多き
とてあたまのりまは武列坂戸り
おのろく病死八十九歳 法名永源

重次

次長清耐 生國同の

東照大指現ふつ久しき家

天正十年清鉄炮足軽二十人をあつ

か

同十八年又清鉄炮足軽二十人をあつ

なまよ部合五十一人

長十九年大坂清陣清旗奉行

とらりて供す

寛永十四年武列坂戸におのろく病

死九十三歳 法名不栢

成重

右京亮 生國を列

大指現つづくもすか

成主弱年の時人といひ神して其のよを

あらすゆくのよもさく新前よゆさて

中納言秀康錦同宰相忠直につふ

寛永二年めされく

台徳院殿とありなり 清前よあえ

騎兵十人 旗炮足将二十人とあつた

同二年 清よあめの時信も京朝よあえ

病死 年一 来

忠次

忠次 忠次 忠次 忠次

成主弱年とありく忠直つづく

成主弱年とありく寛永四年

台徳院殿とありなり 清小姓組

清妻とありなり

真心

新二郎 生國越前

寛永九年十來ありて

將軍あそとありしもの

同十五年清書院書とありしもの

直時

清原重房

越前守

生國冬列墨時

大権現よりつゝしを

天正十八年小田原の陣の時

同十九年奥列の陣の時

文禄元年名護屋の陣の時

長五年関原の陣の時

あづちたふし足軽百十人

同七年清鉄炮足軽三十人

同十八年甲斐國中の事

同十九年元和元年大坂の陣

侍

元和二年

右衛門殿の位おとせをかりぬりしげ主次しげふあづけ

たすたす法鏡ほうきやう炮ひょうをを五十人ごじゅうにんととつつるる

同五年大坂所おおいさかよりよりここちちらら

寛永二年正月朔日あけふ位い五ご位い下げりり叙ぎせ

らね

同四年和泉場いづみの奉行ぶぎやう職しやくををかか福ふくらら

はがね

同五年十月七日じゅうごつにち死しすす時とき五ご十じゅうのの年ねん

車次くるまじ

刑部けいぶ少せう備び 生國なまくに武ぶ列りやく江え戶う

元和七年げんわしちねん

御軍ごぐんああつつくくををりり法ほう鏡きやうのの内うち小こ姓しやう

ここちちらら内うち十三じゅうさん系けい

寛永元十二月晦日かんえいげんじふにがつごころひ位い又また下げりり

叙ぎす

同九年 牧野依波守親成（組）
一 清書院（とつとも）又（西）
書（とつとも）

時錦

孫右衛門尉 生國武列江戸

將軍（とつとも）

寛永十二年十一月大久保（とつとも）

一 清書院（とつとも）

同二十九年

利氏

五郎 生國武列

台直院（とつとも）

同十三年 清書院（とつとも）

同十七年 武列江戸（とつとも）

同二十九年

利正

生國武列

台直院（とつとも）

享長五年とやまごえ小山陣こやまのぼりありこやまごえびよ高田陣たかたのぼりに
侍さむらい

同九年つゝもえん沙使番さしばんとあり

同十二年かつら沙使番さしばんとあり

同十八年かつら江戸えどの所ところなりさしばんとあり

寛永二年かんゑに正月しょうげつ朔しやく日ひ後ご忠ちゆう佐さ下げにきん叙じゆし

強かん正しやう少せう弼しやくとあり

同十二年つゝもえん沙使番さしばんとありさしばん刺さ髪かみ

志し也やとあり

同十九年九月つゝもえん卒す年ねん七しち歳さい

重利しげとし

序しりあり 武列ぶりやく江戸えどにま住すり

台たい徳とく院いん殿でんにま住すりてさしばん水みづ着ぎを

つゝもえん

將軍しやうぐんありてさしばん無む敵てき校がう津つを

組ぐみにま住すりてさしばん沙さ小せう姓せい組ぐみとあり

利世

後清和天皇
御時

長門

左近衛殿

寛永六年九月
父利正先立死す

歳廿五

利宣

八郎

寛永八年

將軍
ある

利喜

長門

寛永十七年

將軍
ある

利春

赤一郎

長門
河内守

系
あり

利本

久太郎 生國武列

寛永七年七歳少く

將軍家とありしを

同十七年少姓組の所妻とつとじ

利直

右近

寛永十八年九月

竹千代君とありしを

利近

同廿年二月所妻とつとじ

長三郎

女子

徳田所妻

女子

加藤所妻

女子

土屋所妻

家紋丸の内ノ新編

伯王

妻本

頼光よりみつより十代じゅうだい古改ふるかへ頼貞よりさだの後のち流妻りゅうさい
本ほんより居い住ぢゆうして妻本さいほんの録りよく号ごうと
りらゆ頼貞よりさだより妻本さいほん伯王はくおうより
いりて中絶ちゆうぜつと

某 ミナ

ひらふのたふ
名部太補

某

なつて
中務

某

けん
源二郎 けん
友右衛門

てんしゅう
天正十年 あけら 明智日向 ひらふ 光秀 ひらふ 城このとき
けん 友右衛門 けん 江列 けん 坂本 けん 西鏡寺 けん 一 けん にか
けん 自害す けん 光秀 けん 伯父 けん ころ けん 小 けん 舟 けん かな
けん 時 けん 一 けん 年 けん 九 けん 某 けん 法 けん 石 けん 宗 けん 某

貞徳 まこと

あつひ 或ハ貞行と云 けん 源二郎 けん 傳名流
けん 母ハ水野下聖守姫
けん 織田信長 けん 一 けん 片 けん 之 けん 馬廻 けん の役 けん と けん 信 けん 長

のら家督と頼忠ふいつりて妻木下居と
え和四年死す七十五歳 法名傳入

頼忠

長門守 後五位下

台徳院殿

元和九年死す時七十九歳 法名

宗鉄

頼利

持原の

長五年人質とちり駿河下向の

内忌部

大掾現とあり

戸へくさる

同五年四月法名傳入とあり妻

本にうつりて領とあり

同十四年よりつゞく

徳

文禄二年

牧野正右衛門尉とて

大指現とあり

文長五年と松景勝叛逆と

大指現こまこと法退治のため法教向の時

小山もく供をす志らるる石田

治部少輔三成と方ふりてしん

岩村の城主田丸中務具安すからる三成

くす岩村ハ妻本れをわたり又高の

城もあるく三成くす時貞徳頼

貞士率とひまわく合戦一勝利と

て首級五十と討り小山へはをた

くもつる

大指現東義流の騒動とあつる

これ之値と丹羽勘今よりいへる妻本の

いしらの
東義徳と志行も
たかやま
高山の城を攻た

大権現園原へ西を去るの時之津見橋より
西進しきりしれしは修治す

同十九年元和元年大坂あ度の西陣
に修治す

永佳

長久寺

元和八年

將軍家とありしを修治す

重吉

彦右衛門

廿年の時森義作忠政の間にありし
のら 忠吉より修治す

大権現ふつへしを修治す

法名宗淳

重直

傳名湯

大指現

台澁院殿

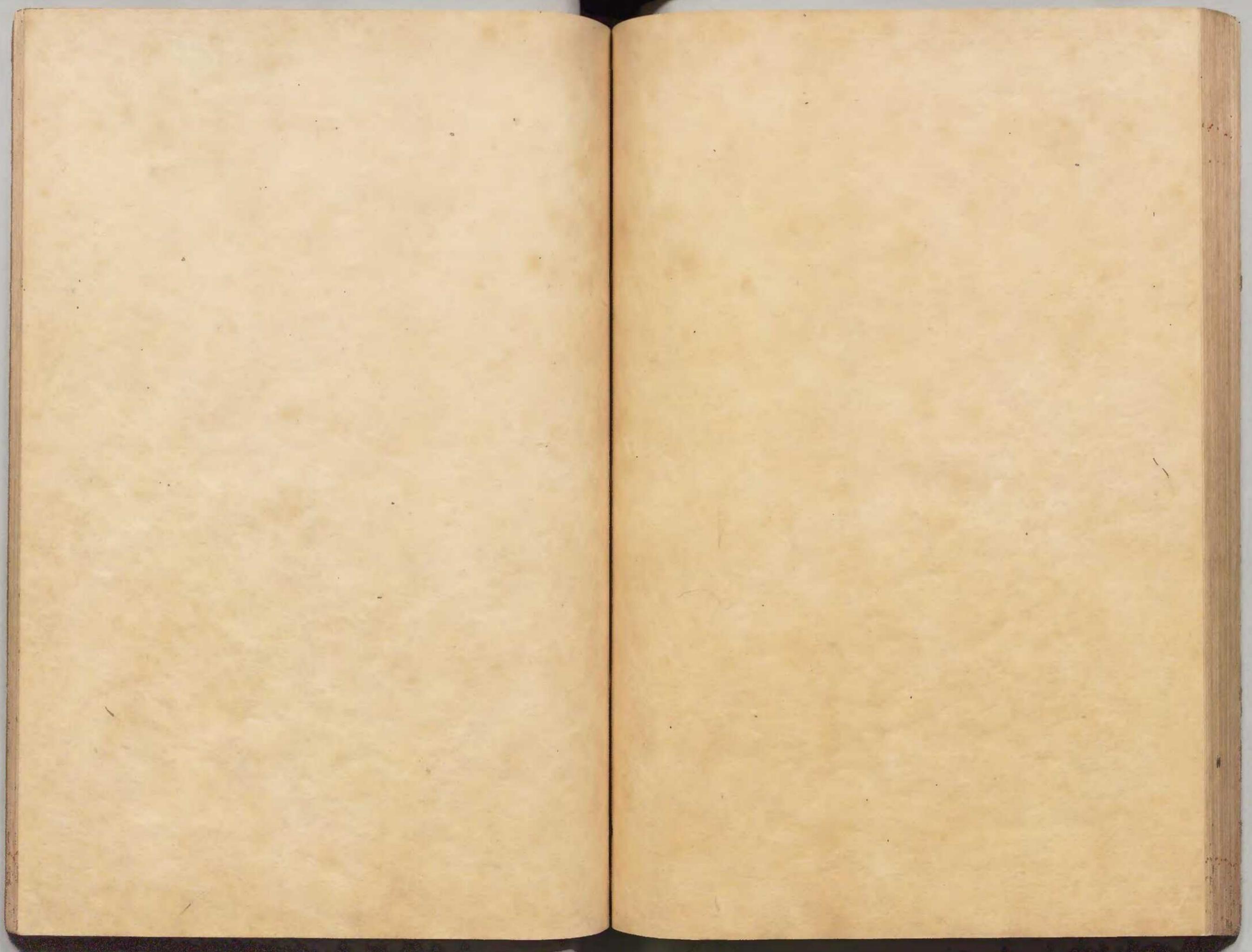
將軍家了

重門

平十郎

將軍家了

家紋桔梗



則康のりやす

民部いんぶ

保たも

保たもくのりくやすめをのり就のり集やすと号す保たもく
 を古ふる波なみのなみ流ながちり古ふる波なみ大おほ膳のり大おほ吏のり
 頼たの康やすののり身み義ぎ徳とくをのり頼たの世よ子こ
 右みぎ馬ま持もち以も之の康やすがのり子こ孫そんちりのり教しやく代だい
 中ちゆう絶ぜつ

天文のちあるに後藤頼英洗國と没落
のに則康浪人とかわり橋列中流小
おもしきこ介男細川右馬頭が喜子や
たわりて細川と号す
天正八年靈陽院義昭と信長と不
まりし時細川右馬頭ふとつひて則
康も伊勢國より保く小信
游川左近一益と安後保く勘右中流の
所は浪人あはく居位と勘右中流の

則康が兄なり

同十年六月十九日小條氏政も游川
一益と武藏野ふたわは合戦の小き
則康も一益に去りし討死時
三十八歳

則貞

長巻

十余歳少く父がうきこへりあひて浪人

かしち家ふよりし統のす等のす果のすたのす〜ひのすふのす細のす川のすと
 あ〜ため〜保のすと号のすすのすをのすほのす九のす列のすへ
 下のすりのす加のす友のす肥のす後のす守のす清のす正のすがのす子のす息のす加のす友のす百のす分のす
 小のす厨のす〜のす船のす解のすへのす渡のす海のす〜のす四のすヶのす年のす
 ありてのす改のす朝のすすのす
 大のす控のす現のす則のす貞のすがのす先のす祖のすとのす志のすありのす〜のすし
 則のす康のす勇のす教のすののす事のすとのす名のすりのす〜のす津のす田のす
 小のす平のす次のす〜のす津のす島のすあのすりのす〜
 文のす長のす二のす年のす〜のすしのす〜のすおのすきのす〜

貞廣 まことひろ

石見守 いみのみ

寛永十一年八月一日のす辰のす子のす位のす下のすにのす叙のす〜
 石見守のす〜のす任のす〜のすとのす

貞子 まことこ

左門 さもん

政延

のちのま

各部少輔 法名堅固

けんこ

尾列羽栗助左衛門の綿と領

楫斐

義濃國古波太即頼清が二男也母守
頼雄法名祐祿の後なり

頼近 よりしの

与右衛門 いとうのまへ
法名素公 そこう
素公の御子 そこうのみこ
居 き

詮政 せんせい

与右衛門 いとうのまへ
法名宗圓 そうえん
宗圓の御子 そうえんのみこ
居 き

政勝 せいしょう

与右衛門 いとうのまへ
法名之休 しゅう
居 き
居 き
居 き

政雄 せいゆう

与右衛門 いとうのまへ
法名全松 ぜんしょう
全松の御子 ぜんしょうのみこ
居 き
居 き
居 き

政宗

与右邊の 法名如天

天正十二年長久手沖合戦の時

東照大指現沖馬と政雄の領地

たまはけとけしめく政雄の姓名と

きこしめく信雄おらつたてのら

大指現政雄の事とたつひのさなま

ついですくに死すのうらやとくは

政雄の子はいつこにのりていふうのり

しこき政宗城尾帯刀のあまの

うきさきしめく右左方の内を野

周防に決す

大指現と詳しただしむつ時とせ

あし

政吉

本右邊の

法名如縁

寛永七年

白蓮院殿と評ら——たぐまひつ

政軌まさのり

才右衛門

將軍家へはくへくまひつ

政綱まさつな

与右衛門

寛永九年

將軍家と評ら——たぐまひつ

同十二年涉小姓組の内番と勤ととし

政均まさひら

与右衛門

寛永十年

將軍家と評ら——たぐまひつ

家紋格校

徳山 とくやま

● 貞信 まこと

三長右衛門

生園流

貞長 まこと

七郎三郎

貞次 まこと

うら右衛門 うら 右衛門 生國同前

貞輔 まこと

うら右衛門 生國同前

貞孝 まこと

兵衛 生國同前

九十三歳 死す

秀現 ひてあき

五右衛門 にの 二位 法平 生國同前

長五郎

東照大指現とあり

同十年四月 台命によりて法平に叙す

同十一年十一月廿二日病死す

重政

五ヶ岳 生國加賀

天文十一年四月

大掟現とる

同十九年大坂陣より供

寛永八年

將軍家の命により布衣とり

同十一年二月二日病死内々軍

重政

五ヶ岳 生國後列

寛永八年

將軍家を有る

家紋地府の丸

先祖の家紋ハ栝は枝なりとしても有る

現あき時りよりりてち地あつまのま府の丸まにありたし

●
時正

肥田

左近衛の生國尾列

三宅宗右衛門の属と

長文三年

東照大権現とあり

大坂ありの清陣

大授現蒙沛こうきんのら

右徳院殿へはく〜くまりら

元和九年七十三し〜く病死

正勝しんしょう

左右兼の 十國武列ぶりく

寛永元し

右徳院殿へはく〜くてきりらまりら

將軍あとあ湯と

同十一年又十三し〜く病死

定勝ていしょう

左右兼の 生國同あ

元和六年

將軍あとあ〜くまりら

寛永十二年しら

右軍あはく〜くまりら

その見きま
家紋桔梗

肥田ひた

● 忠直ちゆうちゆう

河内守かんのしゅ

生國英流しやうこくえいりゆう

忠政ちゆうせい

玄妻けんさい

生國同好しやうこくどうこう

位ゐ長ながよよなるなる——ひてまたまたああききよよほほふふ

忠親

主水 仕國同前

金森法尔小属 法尔死てのら

天文十七年正月

大指現り あり

台徳院殿

將軍 あり

忠頼

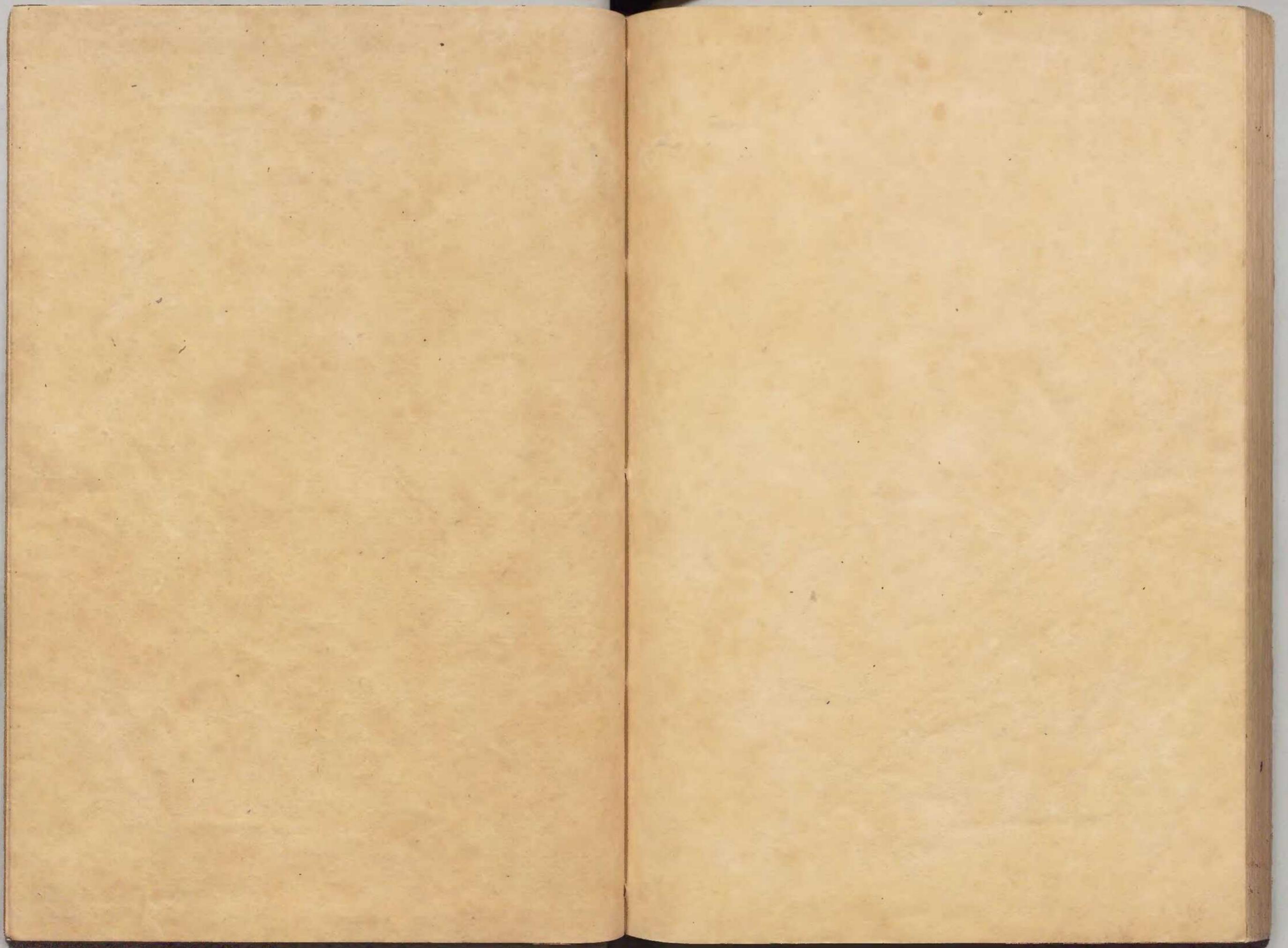
才助 仕國同前

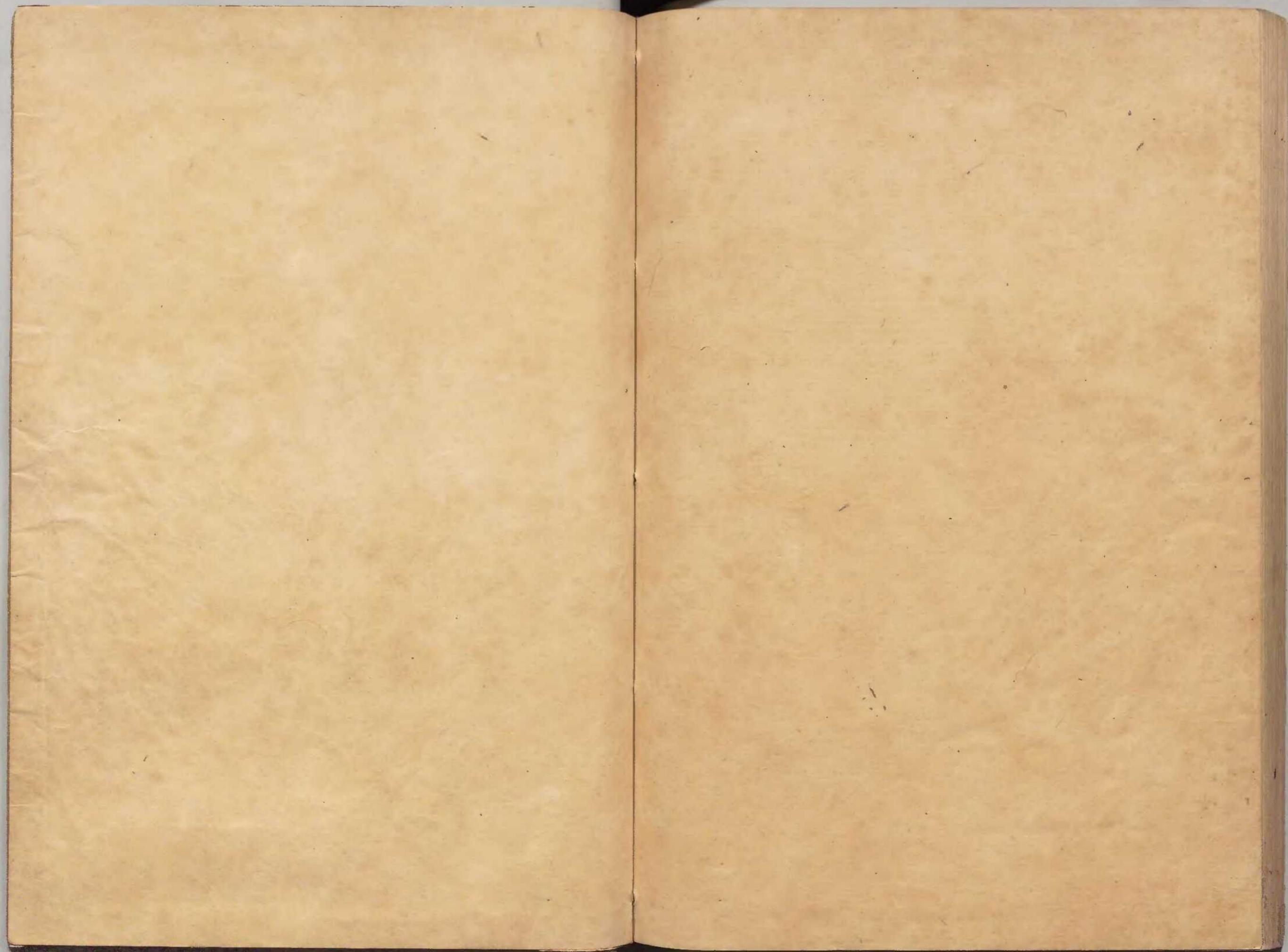
寛永元年十一月廿八日

台徳院殿 あり

同四年正月 小姓組の内番とあり

家紋 龜 酸草





陸
也
緊
字
八
五